

近代人、有島武郎

—— 発達と限界 ——

葛 井 義 憲

はじめに

近代人こそ「自己中心の野蛮人」である。内村鑑三は一九一四(大正三)年の「近代人」(『聖書之研究』一六三号所収、一九一四年一月)という小見出しが付された文章の中で、このことを語った。「彼(≡近代人)に多少の知識はある(主に狭い専門的知識である)、多少の理想はある、彼は芸術を愛し、現世を尊ぶ、彼は所謂「尊ぶべき紳士」である。然し彼の中心は自己である。近代人は自己中心の人である。自己の発達、自己の修養、自己の実現と、自己、自己、自己、何事も自己である。(中略)近代人は墮落せるアダムの裔である。自身神とならざれば止まないのである。寔に彼はアダムの裔である。(中略)余輩は曰へり、近代人は自己中心の野蛮人なりと。」(『内村鑑三全集』二〇、二三九頁―二四〇頁)。

キリストの血潮によって罪が贖われる十字架の信仰、贖罪信仰に生きる内村は「自己中心」の近代人とは異なり、神にあって生きる「旧人」、人と人との間の憎悪が平和へと変わることを神に祈って働く「旧人」である。その「旧人」の弟子に、有島武郎がいた。彼もまた

真理を求め、理想を求め、キリストに倣って生きようとした。けれども、彼はキリストの十字架のみに立つ「旧人」になることができなかった。しかし、私たちは、それだからと言って、彼を「棄教者」として切捨て、彼の「内なる声」「求道への叫び」に耳を塞ぐことはできない。それは内村鑑三研究(内村と有島の親交については別稿以降に譲るが)を発展させる上で、また、近現代に果たす宗教の意義・役割を考える上でも必要であるからだ。それ故、本稿では、「棄教」した以降の有島に重点を置いて、彼の思想展開を考察、素描してゆくことにする。

一 有島の「神」

有島は自らの求道を日記「観想録」に記している。その「第二巻」に、次のような有島の自己凝視を綴った一文(一八九八(明治三一年)二月三一日付)がある。

貧乏人、無知ノ人、罪人、嗚呼窮セザレバ基督ノ酒宴ニ侍ルモノナキガ如シトハ実ニ真理ナリ。余ノ家ハ幸力不幸力不足

ナキマデニ富メリ。余ハ自力ノ屁理屈ヲ製造シ得ル程ノ智識ヲ有ス。余ハ余ノ歴史ニ於テ悲劇ニ接シコト始シト皆無ナリキ一恐クハ縷々来リシナラン、サレドモ余ノ罪深キ不注意ハ之レヲ放任シタリキ一嗟、余ハ実ニ基督ノ酒宴ニ侍リ難キモノナリ。サハレ神ハ全ク余ノ行路ヲ杜絶シ給ハジ。余ヲ窄キ門ニ導キ給ハンガ為メニハ余ハ *sindul* ナルコトヲ覚悟ス可キ一事ヲ残サレタリ。余ノ行路ニハ陥奔ト障害多シ。而カモ余ハ行ク可シ、行カザル可ラズ。

『有島武郎全集』第十卷、一三三頁

彼は富裕な環境（父、武は横浜税関長、国債局長などを歴任）に守られて、種々の辛酸をなめる体験をしなかったことを嘆き、また、訪れたかもしれない色々な窮状に鋭く反応できない感性の鈍さを恨んでいる。彼はこのような無関心、冷淡さを生じさせる原因を、有島の「家」の裕さとその富める環境のもとで得た自己を正当化する「屁理屈」にあると見ている。しかし、彼は一方、ルカによる福音書一四・一三「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」に促され、自己も、他者も含めた人間に生じる悲劇、苦悩、絶望に対して反応し、その側に寄り添おうとの感受性も備えていた。それ故、彼は「人間ニシテ真ノ *simpasy* ナキモノハ殆ンド人間ニアラズ。 *simpasy* ナキ人間ガ不徳ヲナスナリ。不倫ヲ敢テスルナリ。」（『観想録第一卷』一八九八年四月二四日付（『有島武郎全集』第十卷所収、九九頁）との言葉も記す。彼はキリスト教を媒体として「痛み」の関心とそれへの共感を深め、他者の悲劇や苦悩に対する冷やかさを人間の「罪」「*sindul* ナルコト」と捉えた。

有島は如上の「日記」に記載した二年前の、一八九六年九月より札

幌農学校での生活を始め、有島家と交際のあった同校教授、新渡戸稲造の下に寄寓した。そしてこの新渡戸との同居は学習の上でも、人格形成の上でもキリスト者の彼から感化されるものであった。また、彼の親友、内村鑑三の著作や聖書を愛読させるものでもあった。「観想録第一卷」は新渡戸の *Bible Class* で学ぶ有島の姿をしばしば記している（同書、二九頁、三二頁、三六頁、四〇頁）。そうした学びと心の耕しのもとで、一八九八年四月に「観想録第一卷」にシンパシーの文章を綴った十ヶ月ほど後、彼は「基督教信者」（『観想録第二卷』一八九九年二月二日付（同書所収、二七頁））になりたくと表白する。シンパシーは有島を捕らえ、キリスト教は有島にシンパシーの意義を教え、その具体化をも促した。しかし、その結実の一つは、有島が一九〇〇年秋ごろより札幌の「遠友夜学校」で学習指導者として奉仕しだしたことがあげられる。「遠友夜学校」は一八九四年一月、新渡戸によって札幌に設立された。そしてその開校の趣旨は「貧窮せる家庭の児童並に晩學者」のためのものだった（拙稿「新渡戸稲造と留岡幸助」（『名古屋学院大学論集『社会科学篇』三九三所収）、一〇五頁一〇六頁）。イエス・キリストが社会の片隅に救いの光を灯したその愛の働きに、有島も倣おうとしている。しかも、一九〇一年三月には、彼は内村鑑三たちが築いた札幌独立教会（一八九一年に設立）に入会した。

このキリストの僕として、社会の痛苦に心を寄せて活動し、そこに平安の訪れを祈る彼はそれから二〇年ほど後の一九二〇（大正九）年三月に刊行した定稿『惜しみなく愛は奪ふ』の中で、これまでの自らの日々を振り返りつつ、以下のような内容を語る。

他人眼から見て相当の精進と思はれるべき私の生活が幾百日か

続いた後、私はある決心を以て神の懷に飛び入ったと実感のやうに空想した。弱さの醜さよ。私はこの大事を見事に空想的に実行してゐた。

〔有島武郎全集〕第八卷、一三四頁

この著書は米欧から帰国（一九〇三年九月—一九〇七年四月）後、東北帝国大学農科大学（札幌農学校を改称）の英語講師として迎えられ、米欧遊学以前も教員として出席していた札幌独立教会を退会（一九一〇年五月）した十年後に出版されたものである。札幌独立教会退会後の十年は有島が苦しみ求めた信仰を「空想」とまで冷やかに言い切らせるほどの年月であつたようだ。私たちはこの十年余りの風雪の歳月に秘められた有島の「苦渋の足跡」に思いを馳せざるをえない。彼は語る。

私は完全にせよ、不完全にせよ甦生してゐたらうか。復活してゐたらうか。神によつて罪の根から切り放された約束を与へられたらうか。

神の懷に飛び入ったと空想した瞬間から、私が格段に瑕瑾の少ない生活に入つたことはそれは確かだ。私が隣人から模範的の青年として取り扱われたことは、私の誇りとしてではなく、私のみじめな懺悔としていふことが出来る。

〔同頁〕

彼はキリスト者として生きることを誓つた後、「清教徒のやうな清い生活をし、聖書を食とし、祈祷を糧」として過ごした（『リビングストン伝』第四版序言、一九一九年〔有島武郎全集〕第七卷所収、三六七頁）。そこには、謙遜と清貧、愛と従順を備え、ただひたすら「聖生涯」を送ろうとの強い決意がある。そして「観想録第二卷」（一九〇〇年一月二四日付）は「聖書ヲ読ミ心ヨリノ祈祷ヲ神ニ捧」（『有島武郎全集』第

十卷、一六五頁）げる生活を記している。しかし、「聖生涯」を望む生活は武郎が本来求める人間としてのあり方なのかと問いつづけたとき、それは「本来、求めるべき武郎」形成でなく、その形成を妨害するものだと思えるようになった。いや、それどころか、「聖生涯」を望む生活は「あるべき本来の武郎」から逸脱して、他者の賛辞を受ける「模範的な武郎」形成を目指すものにすぎないのだと思われた。「私有島」は私有島の「顧慮の対象なる外界」に支配され、そしてその「外界」の望む形に造られてしまふと感ずるのである。「本来のあべき私（一八七八年三月四日、有島武の長男として東京市小石川に誕生。一八九六年七月、学習院中等科卒業。同年九月、札幌農学校予科五年に入学。）」「独立した一人の私」を求めて、北海道に遊学し、またキリスト者になつたにもかかわらず、その「聖生涯」は彼の希求を壊滅させるかのものであつた。彼はこの「生涯」を客観的に冷酷に眺めたとき、自分は「底のない空虚に浮かんでゐるやうな不安」に襲われた。そして有島の心の底から湧き上がる声は、「お前は私（有島の深奥の声）から遠ざかつて、お前のいふことなり、思ふことなり、実行することなりが、一つ残らず外部の力によつて支配されるやうになる。お前には及びもつかぬ理想が出来、良心が出来、道徳が出来、神が出来る。而してそれは、皆私がお前に命じたものではなくて、外部から借りて来たものばかりなのだ。さういふものを振り廻して、お前はお前の寄木細工を造り始めるのだ」（定稿『惜しみなく愛は奪ふ』（有島武郎全集）第八卷所収、一四四頁）と非難する。彼が求めた「理想」、彼が知つた「神」は「本来あるべき私」を育み、「本来あるべき私」の「礎」にならず、さらに、それを実際に達成させようとする「深奥

の声」とも異なるものと頷かされた。

彼には、自らの「理想」も、自らの「神」も、彼の心を揺り動かすし、彼の「心の奥底の思い」を汲み取るだけの力を有してはいないと思えた。それらはただ有島を「外界」と調和させ、そこで安住しえる「形」に造りあげる「外部の力」にすぎない。それらは確かに彼の深奥に訴える力を持っていないのだ。それ故、彼は「外部の力」、「外部の標準」によって「寄木細工」のように形造られた「私有島」を「あるべき本来の私」と捉えるどころか、忌むべき、誤った像だと理解せざるをえなくなった。さらに、その形成、彫像に励んだ「模範的なキリスト者、武郎」はこれまでの生活を投げ捨てて、彼の「深奥から湧き起こる全要求」に応じて生きようと決意する。これは有島の信仰道程から表れるべくして表れた当然の帰結であろう。

「神の徒」となる上で必要不可欠なシンパシーの耕しは他者の痛みを心を寄せ、その治癒・救済への働きに向かわせるだけでなく、他の存在からも期待される人間となることも武郎におのずと強いていた。そこでは、「外界」が望むような「私（＝有島）」となりえても、「何ものにも左右されない私」「本来あるべき私」にはなりえない。しかも、有島はこの「本来あるべき私」「何ものにも左右されない私」形成を第一義として希求する以上、罪を贖い、救うキリスト教、十字架にのみ立つ信仰生活との訣別も招かねばならない。有島には、「絶対者なる神」が彼の全人格に関わり、彼を打ち砕いて、否定し、悔い改めを迫りつつ、赦し、愛す存在として表れなかった。また、彼の全存在を揺さぶる霊的体験、神から与えられる「いのちの息吹、甦生の風」(spiritus sanctus)も実感することができなかった。彼にとって

の「全能の神」は彼の「本来あるべき私」を形成するための一要素であり、「私有島」を是認し、「私有島」に奉仕する存在にすぎなかったようだ。それは言い換えるなら、彼が「絶対者に赦され、生かされ、導かれる」のではなく、彼が「絶対者」を役使し、「絶対者」を利用するだけだった。彼の「神」は彼の「顧慮の対象なる外界」の「神」であって、彼の心の奥底に深く食い入る「神」でも、彼の心の奥底を激しく揺さぶり、叱り、愛し、語りかける「神」でもなかった。彼は一九一四(大正三)年七月から八月にかけて「小樽新聞」に掲載した「内部生活の現象」でこの思いを痛烈に書き記している。長く煩わしいが、抜き書きする。

お前は教師や聖書から教へられた神と云ふ觀念から、お前の理解の出来る丈けを切取つて神なりとして居たのだ。だからお前は神を信ずると云ふ事を広言してからも、お前の生活は實質的には何等の相違をも来たさなかつたのだ。若し相違が出来たとしたら、夫れは夫に表面的な事であつて、神がお前の衷に住みますのを経験した事などは無かつたらう。お前が神を意識する時は何時でもお前の方から強ひてお前の頭を働かして、神を創造していたに過ぎないのだ。即ちお前の最も表面的な理智と感情との働きて、お前によく似た神を製造して居たのだ。而してお前は上からの力を受けて、お前が自分自身以外の生命に甦つて、已むを得ざるに振ひ立たねばならなかつたやうな経験は持つていないのだ。夫れだからお前の祈は空に向つて投げられた石のやうに、冷たく力なく再びお前の上に着て来るばかりだつた。夫れにも係はらず、お前は切羽つまるまで、お前自身をあざむいて居た。(中略)是れ

からお前は前後もふらずお前の魂に突貫して行かなければならぬ。お前の魂の泉から命を汲み、その礎の上に新しいお前を築かねばならぬ。

〔有島武郎全集〕第七巻、九四頁

「本来のあるべき私」を形成する「礎」は「外界」にあると考えて彷徨しつづけた有島は札幌独立教会退会を境に「外界」の重圧から解放され、そしてその「礎」を彼の深奥に置き、彼の「内なる声」に聞き従って「本来のあるべき私」完成に励もうとする。有島は「本来のあるべき私」を形成する「礎」を見つけたように思った。彼はこの「礎」より湧き上がる「内なる声」に導かれ、支えられながら歩きつづけようとする。

二 「相対界」に生きる

一九一〇年、札幌独立教会退会の年に、有島は「二つの道」（同年五月）、「も一度」「二つの道」に就いて」（同年八月）という表題の評論を「白樺」に執筆している。そしてこの「二つの道」掲載時期は彼の退会時と同月であり、この評論は彼の退会決断をなす上での心の揺れ動きとその決意の覚悟のほどを表している。

「人は相対界に彷徨する動物である。絶対的境界は失はれたる楽園である。」

（同書、六頁）

エデンの園を出たアダムとエバが抱いた悲愴とそれを超えて表れる希望に思いを巡らしつつ記されている。彼は十分に考え抜いた結果、独立教会退会を決断するのであるが、しかし、現実には教会を去るにあたって、親しき信仰の友と別れる寂しさ、「神」を捨て去ることの戦

き、不安を押ししずめることはできなかった。それよりも、「宇宙の本体なる人格的の神と直接の交感」〔リビングストーン伝〕第四版序言（同書所収、三七二頁）をこれまで全くなしえなかったのではないかと絶望、寂寞に襲われざるをえなかった。彼はとうとう「相対界」のみを彷徨することになったと実感する。

今でもハムレットが深厚な同情を以て読まれるのは、ハムレットが此ディレンマ（＝「二つの道」）の上に立つて迷ひぬいたからである。人生に対して最も聡明な誠実な態度を取ったからである。雲の如き智者と賢者と聖者と神人とを産み出した歴史の真唯中に、従容として動く事なきハムレットを仰ぐ時、人生の崇高と悲壮とは深く強く胸に沁み亘るではないか。

〔有島武郎全集〕第七巻、九頁

有島は憂愁をひめた「眉目の涼しい、額の青白い」ハムレットが「相対界」にとどまり、葛藤と矛盾のもとで迷いつつ、生きようとする姿に自らの姿を重ねていた。彼は独立教会退会を執行するに際して、「神」との垂直な関係を「清算」しても、キリストの弟子として学んだ、イエス・キリストの不正に対する徹底した抵抗の精神、また虐げられた人々への愛の業の意義までも否定することはできなかった。こうした「理想」と「現実」、「愛」と「収奪」の矛盾に悩みつつ生きねばならない有島は「人生の崇高と悲壮」をあらわしつつ、「二つの矛盾の道」に立つて苦しみ、生きるハムレットに心を馳せねばならなかった。しかし、札幌独立教会退会後に執筆したであろう「も一度」「二つの道」に就いて」の中では、彼が「二つの矛盾する道」に立つて苦悩する姿は消えつつあった。彼はただ「相対界」を彷徨する現実を受け

入れて生きようとする。

我々の生活に矛盾のないと云ふ様な事が、全体間違つた事実なので、決着した論理が作為である如く、矛盾のない人生と云ふものがあつたらば、自分は其人生の根底を疑はざるを得ないのである。我々は今まで此矛盾を苦痛だと思ひ、恥づべ事だと思ひ、統一した一筋道を歩まねば、内的生活は立ちに消滅すると思つて居たが、絶対的実在とか真理とか云ふものは、全然人間の思度以外にあるものと感じては、此矛盾こそ人間本来の立場だと云ふ事を覺つて、其中に安住し得るのを誇るべきだと思ふ。

即ち矛盾を抱擁した人間全体としての活動、自己の建設と確立、是れが我々の勉むべき目前の事業ではないか。(中略) 絶対觀念に暇乞ひをして、自己に立帰らねばならぬ。而して我々が皆立帰る事に於て成功したならば、其上の要求は其時其処に我々を待つて居るであらう。

〔も一度「二つの道」に就いて〕(『有島武郎全集』第七卷所収、一八頁)
有島は公然と「自己に立帰る」と述べる。彼は「矛盾」に満ちた生活を人間本来の生活だと見なし、そしてその「矛盾を抱擁」した人間の生活に「安住」と語る。これは「相對界」への復帰宣言である。そして独立教会退会後も逡巡したであらう「絶対的実在」の否定、「絶対界」との決別宣言である。また自ずから、これは「自己の至上性」を標榜することにもつながる。

けれども、意氣軒昂に「自己に立帰る」と宣言する武郎の相貌に悲哀があるのを見つけた人物がいる。それは師、内村鑑三である。内村は一九一二年秋、札幌を訪問した折のことを記している。

たしか明治四一年であつたと思ふ。私は札幌に於て彼に會つた其時の彼は前の彼とは全く別人であつた。前にはオプチミスト(樂觀家)なりし彼は其時はペシミスト(悲觀家)に成つて居た。彼の顔に輝きし光を今は認める事が出来なかつた。我等彼の古い友人は、彼の為にも亦我等の為にも非常に悲しんだ。

〔「背教者としての有島武郎氏」一九一三年七月掲載。〔内村鑑三全集』二七所収、五二六頁〕

しかも、そのペシミスティクな氣分を強くする事態が武郎に忍び寄つていた。それは一九一六年の出来事であつた。札幌を去つて、鎌倉で転地療養中の妻安子が肺結核で一九一六年五月に逝去した。また、キリスト教への入信を反対した父武が同年一二月に胃癌で亡くなつた。妻と父の喪失と彼らへの愛惜。悲哀は大きくなってゆかざるをえなかつた。その彼が定稿『惜しみなく愛は奪ふ』(一九二〇年)の中で次のように語る。

私は永劫に対して私自身を点に等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それでも点が存在する如く私も亦永劫の中に存在する。私は点となつて生れ出た。而して瞬く中に跡形もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はゐなくなるのだ。それも私は知つて居る。(中略) 然し私は生れ出た。私はそれを知る。私自身がこの事実を知る主体である以上、この私の生命は何といつても私のものだ。私はこの生命を私の思ふやうに生きる事が出来るのだ。私の唯一の所有よ。私は凡ての懷疑にかゝらず、結局それを尊重愛撫しないであらうか。涙にまで私は自身を痛感する。

〔『有島武郎全集』第八卷、一二七頁〕

有島は自己の存在が「瞬く中」に消え去る「永劫」の中の「点」であつても、じじつ、その「点」が存在する瞬間、今を所持し、また、「尊重愛撫すべき私」をも確かに所有していると実感した。彼にとつて、唯一信頼できるのは、「私」の存在と「私」の在る「今」だけであつた。彼の「本来あるべき私」は「私」と「今」という二点をもつて完成にいたろうとする。それ故、彼は「今」に「最大無限の価値」を置き、しかも、「過去」からも「未来」からも拘束されない自由な「今」を「生命の緊張」をもつて確かに生きる「リアリスト」であろうとする。さらに、彼の内発的要求（「内なる声」）に促されて「本能的生活 (Impulsive Life)」者として生きようとする。

彼は「私」としての存在と「私」のある「今」に信頼をおこうとした。しかも、自らが目指す「本能的生活」の「本能」を「内なる声」と捉え、この「本能的働き」を「愛」と見なした。そしてこの「愛なるもの」は「外界」を容赦なく略奪して、「私」の中に投入しつづける力を持ち、「私」を成長、完成へと赴かせてゆく。すなわち、「愛」を有する「私」は「他者」を、「外界」を撰取しつづけることで豊かに成長し、充実し、完璧になってゆくのだ。「私」の進路には障害はなく、「私」の「外界」は「私」の獲物にすぎない。「私」は何ものにも汚され、傷つけられることなく拡大し、「本来のあるべき私」となる。有島は云う。

愛は自己への獲得である。愛は惜しみなく奪ふものだ。愛せられるものは奪はれてゐるが不思議なことには何物も奪はれてはゐない。然し愛するものは必ず奪つてゐる。(同書、一八〇頁)

有島は不可解な「愛の略奪」を語っている。そしてこの文章の後

に、ダンテのベアトリーチェへの愛が記されている。ダンテはたった一度会つたベアトリーチェに愛を抱きつづけたが、彼女はダンテのその心を知らずに他へと嫁いでいった。「ダンテだけが、秘めた心の中に彼女を愛した。而も彼は空しくあつたか。ダンテはいかにビヤトリスから奪つたことぞ。彼れは一生の間ビヤトリスを浪費してなほ余る程この愛人から奪つてゐたではないか。(中略) 見よ愛がいかに奪ふかを。愛は個性の飽満と自由とを成就することにのみ全力を尽してゐるのだ。愛は嘗て義務を知らない。犠牲を知らない。献身を知らない。奪はれるものが奪はれることをゆるしつゝ、あらゆるともあるまいとも、それらに煩はされることなく愛は奪ふ。」(同書、一八一頁)。

有島の「愛の略奪」は「愛の対象」に心を向けることで「甘美」を与え、そして思い描くことで「豊かさ」をもたらす。すなわち、彼は対象との実際上の交際によって煩わされ、また、それによって「私」が変えられることに変な恐怖を抱いていた。彼はただ興味ある対象を一方的に思いつづけることで「私」を飽満にさせ、対象との直接の交流を行わないことで、「自由」を保ちつづけようとした。彼はキリスト者が自己を空しくして行う「献身」、「犠牲」に偽善者としての臭いを感じ、嫌悪し、それ以上に、「献身」、「犠牲」によって生じうる「私」の内発的要求の抑圧、また、それより起こりうる「私」の変形をも極端に嫌つた。彼は「私」を傷つけ、ひびを入らせるものを極度に拒絶するとともに、関心のあるもののみをひたすら思い、描きつづけることによって拡充しつづけることを望んだ。それ故、彼は現実的に自己を犯し、自己に「変革」を求める危険性の少ない「無垢な存在」に親近感を抱き、また一方では、自己の飽満・完成に一切寄与しない「愛

さない」ものを彼の「愛の略奪」の外に放逐しようとした。彼は今あるこの「私」を是認し、そしてこの「私」の拡充完成にのみ努める。しかし、肉体を有する「私」は「外界」を際限なく摂取しつづけることが困難である。肉体を有する「私」の容量にも限界がある。また、この肉体を有する「私」は永遠に生存しつづけることもできない。

人間は必ずいつか死ぬ。何時か肉体が亡びてしまふ。それを避けることはどうしても出来ない。然し難者が、私が愛したが故に死なねばならぬ場合、私の個性の成長と自由とが失はれてゐると考へるのは間違つてゐる。それは個性の亡失ではない。肉体の破壊を伴ふまで生長し自由になつた個の拡充を指してゐるのだ。(中略)愛したものの、死ほど心安い潔い死はない。その他の死は凡て苦痛だ。それは他のために自滅するのではない。自滅するもの、個性は死の瞬間に最上の成長に達してゐるのだ。即ち人間として奪ひ得る凡てのものを奪ひ取つてゐるのだ。(同書、一八四頁)

「私」の消滅と「私」の容量の限界は紛れもない厳然たる事実として存在するとき、有島はこの状況下で、死の時点を「私」の容量の飽和、すなわち、「私」の完成である「本来のあるべき私」の成就のときだと考えた。彼は「私」を偏愛するとともに絶対化し、そして「外界」を「私」の「奴婢」とした。それ故、「存在する私」の消失は否定しえない事実としてありえても、彼はそれを容認して、自然に時の流れる下で消え去るのを承認することはできなかった。彼は自らが「外界」を飲み尽して獲得した「本来のあるべき私」成就を自らの存在の終焉と同一視していた。彼は「本来のあるべき私」希求のもとで、いつしか「時間」さえも「外界」の事物と見なしてしまつたのである。

それ故、「外界」に位置する「時間」の支配を受けることはナルシスト、有島には堪え難いことであつた。彼は余りにも「今ある私」を絶対化し、そして「外界」を「下僕」として取り扱おうとするうちに、彼の「あるべき本来の私」は現実性を失つて、「空想」の世界を自由に飛翔する架空の産物になりはてた。しかも、彼はこの観念の上での「あるべき本来の私」達成を実際に実現可能と見なしたところに彼の悲劇があつた。彼は極度に「私」と「今」とに収斂するあまり、彼をとりまく空間を喪失し、彼の有する時間をも消滅させて、ただ非歴史的真空状態の下で「私」の完成に向かつた。そして有島は、その「私」の完成は現実性を伴わないものであり、また、彼の描きあげた「あるべき本来の私」は実体をもたないものであることをも断乎として認めなくなつた。彼はこの錯覚を真実と見なし、それにのみ生きること努めた。

三 限界——おわりにかえて——

有島は一九三二(大正二一)年一月、「改造」に「宣言一つ」といふ評論を掲載している。これは有島に彼の「本来のあるべき私」論の不完全さと限界を認識させるものであつた。

私は第四階級以外の階級に生れ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰はうとも思はない。第四階級の為に弁解し、立論し、運動するそんな馬鹿げ切つた虚偽も出来ない。今後私の生活が如何様に変らうとも、私は

結局在来の支配者階級の所産であるに相違ないことは、黒人種がいくら石鹸で洗ひ立てられても、黒人種たるを失はないのと同様であるだらう。従つて私の仕事は第四階級者以外の人々に訴へる仕事として始終する外はあるまい。

〔宣言一〕『有島武郎全集』第九卷所収、九頁

「外界」を自由に撰取し、「同化」しえると信じていた彼が、今、台頭してきた労働者の前にあつて、その労働者階級を吸収できないとの「宣言」を行った。彼の「あるべき本来の私」は「第四階級」という強敵に阻まれなければならない。彼がたとえこの階級を彼の関心の外に置く「愛さない」階級と見なそうとしても、現実に存在するこの階級はいやが上にも彼に自らの存在を意識させ、そして思うがままに「あるべき本来の私」成就へと突進しようとする思いに亀裂を生じさせる。しかも、この階級は非歴史的真空状態で自由に拡充しつづけていた「私」を「空間」に位置する存在として意識させたのである。すなわち、有島がいみじくも語った「第四階級者以外の人々に訴へる仕事」をするということは、彼の「私」拡充に限定を設けたことになる。そして彼は、一九二三年七月、彼が所有する北海道胆振国の狩太農場（＝「有島農場」）を小作人たちに解放した。これは小作人たちの解放であるとともに、有島が「第四階級」から解放されたいとの願いでもある。「遠友夜学校」での教育ボランティア活動、キリストの「虐げられた人々」に注ぐ愛への共感、経済的、階級的に格差と矛盾をもつ社会の実態から目をそらすことを阻んでいった。彼は自由に「空想の世界」を飛翔する羽をもぎ取られ、そして意識下に眠らせていた「限界の事実」に目を向けなければならなくなった。彼は「本

来のあるべき私」に全幅の信頼を置いて生きることができなくなってしまった。彼の「本来のあるべき私」論は徐々に翳りだした。

一九二三年六月の「独断者の会話」の中で、有島は「お前は生命といふものをしっかりと感ずることが出来ないでゐるのだ。空虚が一死のやうに恐ろしい空虚がお前の生命を蝕みはじめたのだ。その空虚が段々大きくなつて行きはしないかといふ予感で、その予感だけで、お前は忍び得ない程慌てふためいてゐるのだ」（『独断者の会話』『有島武郎全集』第五卷所収、五〇八頁）と書き記している。彼は「私」の内奥に確かにひそむ「空虚」を見つけた。彼はこれまで「本来のあるべき私」を求めて「相対界」を彷徨しつづけた。しかし、唯一信頼できる確かな存在の「私」の奥底で空虚感が漂いだし、しかも、その「私」を蝕んでいった。

有島は札幌独立教会退会後、「相対界」にとどまることを決意しながら、歴史的被制約者である「私」を無制約者である「神」にまで祀り上げる錯誤を犯してしまつた。そこには、「私」への偏愛、「私」を変容させることへの恐怖、あるいは、現実の「私」を限りなく拡充したいとの欲望があつたためであろう。そして歴史的被制約者としての「私」を「いのちと愛と光」を尽きることなく与えつづける無制約者へと転化させた場合、その「私」は虚無と絶望と破滅へと誘われてゆく。有島の師であつた内村が一九二四年二月に再度「近代人に就て」を「聖書之研究」二八三号に記した。多くの俊秀の弟子をもつた内村ならではの言葉であろう。その一文をもって結びとしたい。

近代人は恐ろしくある。彼は自己主義が極度に靈化したる者である。彼は自己に就て毛頭疑いはない、而して万事に就て自己の

判断の正しくあるを固く信ずる。彼は万物を自己に服従せしめんとする、然れども自己は何者にも服従しない。彼に彼れ自身の道徳がある、又彼れ自身の神とキリストとがある。如斯にして彼は千九百年間の基督信者の実験として伝へられたる基督教には全然反対である。実に近代人は近代文明の生んだ駄々児である。彼の宗教は伝統的基督教の他者奉仕なるに反し、自己奉仕である。近代人はまことに恐ろしくある、然し乍ら我等は彼を恐れぬ。彼は歴史上最初の実例でない、彼に類したる者は今日まで幾度も世に現はれた。近代人の我儘勝手が行はるゝのではない、神の御旨が成るのである。故に安心である。

『内村鑑三全集』二八、二二八頁―二二九頁

資料、参考文献

- 『有島武郎全集』第五卷筑摩書房、一九八〇年。
『有島武郎全集』第七卷筑摩書房、一九八〇年。
『有島武郎全集』第八卷筑摩書房、一九八〇年。
『有島武郎全集』第九卷筑摩書房、一九八一年。
『有島武郎全集』第十卷筑摩書房、一九八一年。
『内村鑑三全集』二〇岩波書店、一九八二年。
『内村鑑三全集』二一岩波書店、一九八二年。
『内村鑑三全集』二七岩波書店、一九八三年。
『内村鑑三全集』二八岩波書店、一九八三年。
宮野光男著『有島武郎の文学』桜楓社、一九七四年。
安川定男著『有島武郎論』明治書院、一九六七年。

(10)

- 山田昭夫著『有島武郎・姿勢と軌跡』右文書院、一九七九年。
鈴木範久著『内村鑑三をめぐる作家たち』玉川大学出版部、一九八〇年。
安芸真雄著『晩年の内村鑑三』岩波書店、一九九七年。
内村美代子著『晩年の父内村鑑三』教文館、一九八五年。
矢内原忠雄著『内村鑑三とともに(下)』東京大学出版局、一九六九年。
拙稿「新渡戸稲造と留岡幸助―「小さき者」の側で―」(名古屋学院大学論集『社会科学篇』三九―三)名古屋学院大学総合研究所、二〇〇三年。
W. James, *The Varieties of Religious Experience* (New York: Dolphin Books, 1902)
ウィリアム・ジェイムズ著、比屋根安定訳『宗教経験の諸相』誠信書房、一九五七年。
G. Gutierrez, *The Power of the Poor in History* (New York: Orbis Books, 1983)
A. Nygren, *Agape and Eros* (London: S. P. C. K, 1953)
P. Tillich, *Sozialphilosophische und ethische Schriften* (Berlin: De Gruyter, 1998)